

## D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

### ①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

#### ●青山学院大学 国際政治経済学研究科

##### 「グローバル・エキスパート養成プログラム」の事例 <人社系>

###### 具体的に何を実施し、何が困難であったのか

海外のフィールドワークとして、途上国の大学や国際NGOとの連携で社会活動を行い、実践的な経験を積ませた。初年度は難民キャンプの視察とそこでの子供の生活支援活動、次年度には環境問題を中心にし、世界遺産や都市部のクリーンアップキャンペーンを行った。これら活動を開発するために海外の当該機関との交渉に時間と労力の多くを費やすこととなった。

###### 苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

特に普段の講義と研修の交渉を同時に行うには、複数のスタッフが必要であり、人材が不足している中で、実践に精通してなおかつ大学院教育ができる資質を持った適任者を準備することの困難さを感じた。このことで、限られた回数と規模になってしまった。

###### どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

プロジェクトを担当する教員を複数雇用し、役割分担をして、研修先の開発に努めた。当プログラムは全くの初めての試みであったので、規模の制約は仕方なく、中期的展望に立ち研修先を開発し、準備する必要性を感じた。なお参加した学生達からは、個人では決していけない場所と活動ができたことへの充実感と研究テーマの設定に極めて有用であるとの声が聞こえてきた。複数の者が、次年度も参加して経験を積んで行くことができた。

#### ●大阪大学 基礎工学研究科システム創成専攻

##### 「システム創成プロフェッショナルプログラム」の事例 <理工農系>

###### 具体的に何を実施し、何が困難であったのか

嬉しいことに、海外研修、国際会議参加研修への参加に対して非常に満足を憶え帰国した学生が、他学生、後輩学生へ積極的な海外学術経験への参加を勧誘してくれた。しかし、このため海外渡航の希望者が年度が進むごとに増え、最終年度では、

人件費を除いた予算のほとんどをこの海外研修に投入せざるを得なくなった。高度プロフェッショナル人材、グローバル人材の養成の観点で、学生が獲得した行動規範と学習意欲は極めて大ではあったが、予算負担もかなり大きく、他の活動を抑制せざるを得なくなったことが課題となった。また、学生の海外研修、国際会議参加研修の人数が増えるに従い、英語力、海外渡航の事前準備や異文化、近現代史への心構えが不足している学生が紛れ込むようになり、その対応に苦勞した。

**苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか**

海外滞在中の学生の安全の確保は常にプログラムの最重要事項の一つとして位置づけていたが、平穩な日本でこれまで過ごし、海外に出たことのない学生に対して、海外渡航リスクを実感させること、またそれが所属領域、所属研究室でばらつきが大きいことに困難さがあった。安全の確保という観点、多くの学生に海外研修、国際会議参加研修へ参加させたいという観定の両方から、一見、学生には贅沢に見えるが、旅費の十分な確保も困難な要因の一つであった。

**どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか**

幸い、本プログラムで海外滞在中にトラブルにつながった例はなく、学生の評価や感想に問題点の指摘は出てきていない。国際交流委員会が作成した海外渡航マニュアルを配布するなど、安全確保に慎重に対応したが、安全へのリスク管理・対策の一層の徹底に上限はないため、派遣する側の教員の不安はなくなるものではない。海外安全教育は一教育プログラムが行うというより、今後は全学的組織あるいは大学間共通組織を立ち上げ、そのような組織の専門家が効率的に行うことが適切と思われる。

## ●産業医科大学 医学研究科

「国際産業医学研究者育成教育イノベーション」の事例 <医療系>

**具体的に何を実施し、何が困難であったのか**

院生の英語力がまだついていない点で国外での研修が受動的になっている。

**苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか**

トレーニングのためのカリキュラム、ディベート力や問題提起力などの育成のためのものが不足していた。時間をかける必要性もある。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

研究テーマ毎にグループ討論の機会を作ることなどをしておくべき。更に今後は海外研修やインターンシップの導入を目指していく必要性を感じており院生からもより積極的な交流の場の提供が期待されている。

## D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

### ①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

#### ●事例6

##### 具体的に何を実施し、何が困難であったのか

国内企業等でのインターンシップを計画し、県庁・市役所における協議を進め、市環境保全課における環境（森林・水・大気等）分野のインターンシップの枠組みを形成することができたが、補助期間内に派遣することはできなかった。

##### 苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

実施時期、本プログラム学生の研究テーマや学修計画との適合・調整、言語能力（日本語運用能力）等が課題となり、結果として実際の学生派遣には至らなかった。

##### どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

結果的には実施に至らなかったが、①体系的な環境観測手法、②環境資源の管理方法・システム、③資源利用・評価（廃棄物処理やごみ問題等含む）、④環境汚染対策等における日本の先進事例等を修得するという枠組みをインターンシップ先と構築することができた。今後は、本学学生の在籍期間が2年と短いため、インターンシップ先とのマッチングを入学直後から検討・調整していくこと、本学の学生への言語対応が可能なインターンシップ先開拓等が必要である。